
魔法使いブー

柴田 豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いブー

【Nコード】

N1498S

【作者名】

柴田 豆

【あらすじ】

僕、ブタのブー（4年生）は魔法使いになった。
ネットで見つけたんだ。

でも、いい事ばかりじゃなかったよ。

逆に苦劳ばっかだけど、何とかがんばります！

ネットで

「あ。」

趣味のパソコンで遊んでいた僕はつぶやいた。

「えーと・・・」そのあなた！魔法使いになってみませんか！
？下の「申し込みしよう」に住所と名前を書けば、すぐに家庭教師
がやってまいります！」・・・なんか、うそくさいなあ。」
でも、正直気になる。申し込みしようかな・・・

「ブーちゃん！ごーはーん！やめないとパソコン禁止だよ！」

あー、また言った。まったくうちの親ときたらすぐ禁止禁止って。
このあいだも、僕の趣味のタロット占い一週間禁止にされたし。も
ー、まったく！

僕はパソコンをスタンバイ状態にしてリビングに向かった。

「さ、早く座わって。」

言われなくても分かるよっ

「はい、いただきます。」

夜はチャーハンだった。僕はボーとしながら食べた。

「どした？ブー。なーんか自動的に食べてるみたいよ。」

姉ちゃん、ほっといとくれ！

「なーんか馬鹿っぽいよ。ふふっ」

はいはい、どーせ馬鹿だよ。もー、さっきの申し込みか考えたいの
にー

「ごちそうさまー」

言った瞬間に僕はどたどたと階段を駆け上がって、自分の部屋に入
った。

そしてパソコンを開いて、住所を書き込んだ。

「よし、終わった！」

僕はもうご飯中に決心をつけた。

僕、魔法使いになる！

魔法ブタ妖精参上！

ー朝五時ー

「おーきーてー！」

ん？だれだろ。うるさいなあ。布団かぶろ。

「おーきーてー！おーきーてー！」

「んもー、うるさい！」

僕が起きてみたらなんと周りに誰もいなかった。怖い・・・、心霊現象だ・・・

「わわっ、急に起きないでよ。」

「え？君はどこにいるの？」

ふりむいても誰もいない。やっぱ、怖い・・・

「あたしはここよ！ほら、あんたの耳の中！」

耳の中？どーりでかゆいとおもったら・・・、あ、魔法ブタ妖精だ。「こんにちは。あたしはパッキー。これからアンタに魔法を教えるわ。」

え？ああ。れいの家庭教師か。でもちっちゃいね。身長は大体2？。すごいよ。

「僕はブー。よろしく。」

「じゃあ、さっそくデビューセットもらいに行きましょう。」

「デ、デビューセット？」

「あ、知らないか。デビューセットはね、言葉のとうりデビューしたときにもらうセットよ。ここでいえば入学セットね。」

ふーん、そうなんだ。

「じゃあ、魔法界のどこにある、「キメカ屋」に行こ。」

パッキーが言った瞬間になんか、変な世界に来ました。ここが魔法界？薄暗いなあ・・・しかも、なんか不気味だなあ

キメカ屋のサカさん

「じゃあまず・・前行って、左曲がって、裏通りを通ってずっとまっすぐ行くとあるの。」

ふーん。えっとまず前、左、そして裏通り。で、まっすぐと。あ、あったよ「キメカ屋」。

僕はとりあえずドアを開けた。開けている時、ギギイガチャリという音が聞こえた。うわっ、いやな音ー！

「ごんにちばあ。ばぐばギメカ屋のでんちようのザカだ。よろじぐ。」（ごんにちは。僕はキメカ屋の店長のサカだ。よろしく。）

中にいた人（ブタって言った方がいいかなあ？）は全身黒で、声のすごく低くてなんか怖い。というか、「ごんにちばあ」ってもう挨拶になってないって！

「ほら、「デビューセットください」って言えばいいだけよ。」

耳の中でパッキーが言った。パッキーは僕のお母さんかあ！

「うるさいよ、パッキー。分かってるって。」

「ええ？ぎみ、だれどバナじてるんだい？」（ええ？君、だれと話してるんだい？）

「しっ！私はアンタしか見えないのよ！？しかも耳にいるのよ！あんたが一人で話してると思うわ！あと、声は小さくね！」

なんか今のですごい言われたんだけど！

「あゝ、僕、デビューセットほしいんですけど・・・」

「おお、デビューセットが。今用意する。」（おお、デビューセットか。今用意する。）

すると、サカさんは奥の扉を開け、すたすたと中に入ってしまった。

「もうっ、馬鹿ね！妖精は見えないって分かるでしょう！？ったくう、私はお馬鹿な弟子を教育かあ。」

まただめだしタイムですか。っていつの間にかサカさんが奥の扉を閉めてこっちに来た。

「おい、これだ。」（おい、これだ。）

中ぐらいのダンボールをカウンターにドンと置くと、「もっでげ」
（もってけ。）と言った。

「さ、あんたのそこ帰るわよ。」

パッキーがボソツと言った。

「じゃ、ありがとう、サカさん。さようなら」

僕は手を振りながら歩いていった。僕はドアが閉まる直前に
サカさんの顔を見た。照れてる。ありがとうといわれて嬉しいんだ。
なんだ、怖い人かと思ってたらそうでもなかったよ。なんか、安心。

朝練

そして僕たちはキメカ屋を出て家に帰った。ああ、やっと寝れるよ。
。おやすみなさい。

「ちよっとー！朝練^{あされん}忘れんなー！」

へ？あ、朝練？なんじよそりゃ。

「あ、朝練はそのまんまよ。朝魔法を練習すること。まあいつもは5時からんだけど・・・今6時だし、今日学校あるらしいから少ししかできないわ。」

ま、最初はそんなぐらいいいよ。

「一日のスケジュールはまず朝練が5時から8時まで。昼練^{ひるれん}は3時半から夕食の時間まで。夜練^{よるれん}は8時から11時まで。」

ぎよえええええー！きっ！寝ることが好きなのにそんなに寝る時間を削らんでー！

「じゃあデビュースセットの中開いてみい。教科書入ってるよ。」

僕はデビュースセットを開いてみた。そこには・・・僕の予想外の教科書が入っていた。ふっ、きれいで、薄い教科書がいっぱい入ってるのかと思ったら、厚さ3？ぐらいの一冊の教科書が入っていた。しかも、古くからありそうな（紙が黄土色になってたり。）教科書だった。なんか本当の魔法使いになった感じ。

「ハイ次！魔法使いの制服を着ろ！」

え、制服なんかあんだ。初耳ー。

「それもデビュースセットの中入ってるから。」

ふんふん、コレか。

「ちゃんと着てよね。師匠の私が恥ずかしくなるから。」
ちゃんと着るぐらいできるわああー！！

ーそしてー

ふう、これであってるかな。

しかし、すごい暗い色だね。とんがり帽子と、マントと、その下に

着てるサロペットみたいなやつ、コレすべて暗い紫。黒といえば、サロペットっぽいやつの中には、ちょうど結びされているひもと上がグルグルになっている杖ぐらいかな。

「んっ!？」

なんだ、急に。

「パッキーどうしたの？」

「お母さん来る。こんな姿見られる前にかくれて!」
え?てか何で分かんのか?

「ほらっ、はやくっ」

ぼくはなんだか分からなくてなんか突っ立っていた。するとー

「ブー!ご飯よ!」

うわわわわー!お母さんだー!こんな姿見られたくないよ!ああ、大ピンチ!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1498s/>

魔法使いブー

2011年10月8日20時51分発行